

芥川だより

発行日*2020年8月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集 川口 伸

印刷・発行 下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****



えらい奇遇

診察台に座るなり「お久しぶり！」と医師から声を掛けられフェイスシールドをした医師を見るとなんと十数年前に蓄膿症を患い辛抱しきれずに訪れたこの病院で初めて診てもらった医師だったのである。若くて美人の医師にすすめられ断り切れずに蓄膿症の手術をした。当時は、非常に時間のかかる痛い手術であった。手術後のガーゼの詰め替えなど思い出すだけでも嫌だ。

しかし、手術後の調子は良くて「なんでもっと早くせんかったんやろ？」と快適な日々を過ごしたので、彼女には感謝している。また、血液検査のCKの数値が異常に高いことに気づいたのも彼女だった。数年後、筋炎で入院していた阪大病院の通路でも「こんなところで何をしてるの？」と白衣を着た彼女に声をかけられビックリしたこともあった。

初々しかった彼女も今や部長になりテキパキと診察し「まだ小さいですけど、放置しておくのとガンになるかもしれないし、大きくなって息苦しくなるかもしれないから手術後しましょう。私のスケジュールでは翌週の月曜日だけは空いてますから、その日にしましょう」免疫内科の担当医に電話しながら、「あなたの患者を手術することになったから、術時のステロイドの量は幾らにする？分かった」と言いながら携帯を切って、またマウスピースを作るための口腔外科にも電話する。「入院日は、金曜日ね。少し血糖が高いから安定させステロイドを飲んでるから、手術の負担で多発性筋炎が再発したら大変だから点滴でステロイドを増量し術後2日目で元の量に戻す感じね。あなたの担当医であるDrとはよく話をしている、あなたが六甲山にもよく登っていると聞いているわ。少ししたら、また煙草もすすめるから。」これが殺し文句だ。手術の時、彼女の気合が伝わってきた。小さな声帯に出来た2ミリ位の腫瘍を顕微鏡で見ながら1時間もかけずに切除してくれた。「きれいに出来たから」と念を押し、手術後も病室に度々来てくれた。腫瘍の検査結果が出た時は、時間外であったが飛んできて「今、検査結果が届いたわ、炎症性でガンではありませんでした。よかった！」と言って満面の笑顔。またまた、彼女に助けられた。人の縁とは不思議だ。

死をめぐるあれやこれ(69)

石川 吾郎

高齢者を殺す政府のコロナ無策の罪

新型コロナウイルス感染に対する政府対応があまりにひどい。七月末現在で、感染拡大の勢いは留まることを知らない。にもかかわらず、感染防止のカギとなるPCR検査を本気で増やそうとせず、感染を地方に拡大するゴゴトラベルキャンペーンも中止せず、野党が要求する臨時国会の招集も拒否し、安倍首相はトップとしての責任から逃げ続けている。政府は感染拡大に無関心、ないし放置をしているとしか言いようがない。◆スウェーデンは集団免疫を獲得するために、故意にコロナ感染を防止せず経済を動かしたことで有名だ。この国はどうなったか。死亡率は世界でトップレベルに高い。死者の九割が七十歳以上だが、集中治療室に入った患者は、七十歳以上は約二十%、八十歳以上は三、四%しかいなかった。つまり高齢者の多くは、集中治療室に運ばれずに死亡したという。これは医療崩壊を防ぐために「高齢患者をむやみに病院に連れて行かない」とのガイドラインがあったからだと言われる。スウェーデン政府は「高齢者(と基礎疾患保有者)を見捨てる」政策を行った。つまり「命の選別」を行ったわけだ。「他の北欧諸国の十倍の人が死に、経済的利益もない。まったくの惨劇。集団免疫には五万人の死者が必

(裏に続く)

要たろう。これはあまりにむごい実験だ」と批判されている。日本もこのままに無策な状態が続けば、スウェーデンと同様に「あまりにむごい実験」となってしまうだろう。◆それに比べ、流行の初期から徹底的にPCR検査を行い、補償を伴う休業など規制を強めたニュージーランドや台湾は、現在では流行を完全に食い止め、経済を立て直し、日常を取り戻しているという。すでにニュージーランド並みにはいかないが、日本をスウェーデンにしてみたい。

芥川だより一六三号 目次 ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム 68	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 77	坂本一光	2
哲学爺いの時事放談 27	祖蔵哲	3
大峰奥駈道 33	下村嘉明	6
大人の今昔物語 70	石川吾郎	7
新型コロナウィルス愚考(4)	明石幸次郎	8
オクラの山たより 47	因了生	10
隠された歴史 22	満田正賢	13
道をゆく 15	成瀬和之	16
道をゆく 16	成瀬和之	17
編集後記	S K 生	17
ふみの道草 26	山椒魚	18
俳句	土田裕 影山武司	18

素老人☆よもだ帳 (77)

坂本一光

◆うたでつづる水と憲法
はじめに

水と戦後の平和は、日本国民にとってはあたりまえで、ありふれたものであったかもしれない。しかし、たとえば、アフガニスタンにおける中村哲氏の活動と彼の死が象徴するように、世界の現実は、

どこにでも水と平和はない地球

であった。あたりまえだと思ってきた水と平和が、実は奇跡とも言えるものであるなら、私たちにとって、

ありふれたものに奇跡を見なければ

奇跡はどこにも永遠にない

ことを自覚し、その奇跡を問う意義は大きいと思う。

そう考えた私は、先に『ありふれた奇跡、

再び―生きる基本の水と憲法』(注1)と

いうエッセイを本紙に寄せた。そこでも触れたことであるが、奇跡とは『常識では起こるとは考えられないような、不思議な出来事』である。したがって、奇跡は、一般に、神的な力との関わりでとらえられることが多い。しかし、ありふれた奇跡とここで言う奇跡は、よく学ばなければ、つまり、よく知りよく思いよく考えなければ、それ

が奇跡であることに気づくことさえないような奇跡である。よく学ぶ精神は、科学的精神に通じる。前に書いた水の不思議のように、科学で知る奇跡もあるのだ。

今回のテーマは、恥ずかしながら、水と憲法を素材にしてこれまで私が詠んだ川柳と短歌を紹介する、「うたでつづる水と憲法」である。これまでに紹介した歌も含むことをお許し願いたい。想像をたくましくしてお付き合いくださいらうれしい。

1 水をうたう

(1) 川柳に詠む

水は、命を生み、命を育てるに不可欠な物質である。水の星である地球には命があらふれている。水の星というとき、その水は、大量の液体として存在する水のことである。地球の水の97%は海にあるが、蒸発し、雨や雪となって地表をうるおし、川となりまた海に戻る。地球に大量の水が存在するのは、太陽からの距離がほどよく(約1.5億km)液体の水が存在できる熱平衡を保持できたことと、地球のほどよい大きさ(質量)に基づく引力が水を宇宙空間に逃がさなかつたことによる。この二つの条件を満たしたのは、太陽系の中で金星でも火星でもその他の惑星でもなく、地球だけであった。そういうことに思いを馳せながら、水を五七五の川柳に詠んでみた。

ありふれた水に花咲く命咲く

命なきものと命をつなく水
ありふれた水が命に満ちる星

また、人の生き方や社会のあり方に関わつて水を詠めば、こんな川柳もできる。

メルトダウンありふれた水間に合わず
政権を投げた男のコントロール
方円に従う水の太っ腹
方円に従う水のように母
水の輪のまんまるまるい命の輪

さらに言えば、深いところで温暖化がもたらした結果であるう夏の水の暴力はすさまじい。

ありふれた水が凶器に変わる夏
いのち生む水はいのちも奪う水
温暖化一度で空の底が抜け
降る方が蒸発よりも多い雨
降るときはとことん降ると夏の雨
人が住む星でなくなるかも知れぬ
そして、一滴の水に私が見たもの。

一滴の水に命もよみがえる
一滴の酒も涙も水の精
一滴の水に見果てぬ万華鏡
一滴の水の向こうに大宇宙

(2) 短歌に詠む

地球が水の星であることには、前節に述

べた地球だけが持ちえた2つの奇跡的な条件に加えて、水という物質が持つ特異性が深く関わる。電気的な極性を持つ水分子は、極微の粒子に似合わぬほどに互いに強く結び付くとともに、あらゆるものをよく溶かすことができるという特異性である(注1)。

氷点下八十度にて沸くはずの水地にあふれいのち生む星

ここにあるどんな不思議に増してなお水が命を包む不可思議

水の星地球に咲いた石の花地球の石は色もとどり

ありふれた水への思いは、また世の中の出来事への思いと重なることもある。

ありふれた水の怒りか汚染水廃炉への道ぬかるみにして

ふるさとの神も仏も溶けている墓標のごとき汚染水タンク

極微なる水がつながり海鳴ると確かに聴きしシールズの声

何もかも水に流せば楽だけど我が身あらかた水なれば止す

フクシマの核汚染水辺野古の海怒りの水の沸騰止まず

方円の器に従うという水に憧れていて角は取らない

2 憲法をうたう

平和と憲法の問題は、不幸なことであるが、とりわけこの数年間にわたり、すぐれて時事川柳及び時事短歌の題材であった。

(1) 川柳に詠む

戦せぬ国のかたちを決めた夏一滴の戦死の涙ない戦後

もつと右もつと右へと国の舵音もなく戦の前になる気配

戦争は徐々に近づきあつと来る考える輩も悪魔になる戦

浪々も心ならずももうご免汝の敵愛する前につくらない

花は咲く人は平和を思うもの

(2) 短歌に詠む

生きてゆく基本に政治があることをうかうか忘れ来しことを恥す

憲法を暮らしの中に生かそうと

「ひとり九条の会」を始めぬ

九条の国なればこそありふれた昇る朝日も平和の光景

幾百千万の眼が国会に

注がれし夏戦争法の夏

憲法九条かたちは心であり

心はかたちになるというまこと

二億年銀杏は銀杏

戦せぬ国のかたちはまだ七十年

季節みな美しい国が何ゆえに

花も実もあり根も葉もないか

誰が空ぞ こは誰が海ぞ誰が土地ぞ

辺野古・普天間われらがものぞ

鋼鉄はいかに鍛えられたか

島ぐるみ辺野古にノーの声は止まない

九条は退かざるもの凜として

国のかたちの真ん中に立つ

春一斉抵抗の芽が吹き出すと

蟹工船のラストの予感

おわりに

川柳も短歌も詠みたいことを自由に詠めばいい。しかし、日々の小さな感動を率直に詠むにはまだ時間がかかりそうな世の中である。

(かたちは心であり、心はかたちになる
大分の素老人)

(注1) 素老人☆よもだ帳(68)、「ありふれた奇跡、再び―生きる基本の水と憲法」、『芥川だより』No.154(二〇一九年十一月一日)。

哲学命いの時事放談(27)

祖蔵 哲

ペストとコロナの哲学

現在8月初旬、5月25日の緊急事態宣言解除後、すでにコロナ第二波到来である。しかし、政府はこの状況においても「直ちに緊急事態宣言を出すような状況ではない」という認識を表明している。日本では4月7日に緊急事態宣言が発令されると翌日から公表される感染者数は500人を超える新しい水準へと移った。コロナの患者数は東京五輪の延期が決まった3月24日の直後に増え、緊急事態宣言の直後にも増え、そして7月5日の都知事選挙の直後に東京都の感染者数が増え始めている。これでは政府や自治体は何らかの情報操作をしているのではないかと疑う。

このような状態にあつて、まだ経済優先の「GO-TO キャンペーン」をする背景には政治家が持つ3つの理由があるらしい。一つは「4月の時とは違う」ということ。「検査数」「医療崩壊が起きていない」「感染は若者中心」「感染源は夜の街」という「違い」である。しかしこれらはいずれも科学的根拠はない。二つめは「死者数が少ない」で、最後は「冬になれば緊急事態宣言を出さざるをえない」であるらしい。第一波の時は「人命と経済を天秤にかけることはできない」と国

民も政府も意気込んでいたが、いずれ再び「緊急事態」が出されるまではできるだけ今のうちに経済を頑張っておこうという魂胆であろう。

こうして政府は極力、第二波を認めず、緊急事態宣言を検討せず、経済優先を掲げる一方で、国民は自衛目的での自主自粛に入るという奇妙な「ニューノーマル」が始まっている。百年前のスペイン風邪も第二波のパンデミックの被害が大きかった。おそらく新型コロナウイルスもそうなるリスクを抱えているだろう。

さて、新型コロナウイルスが猛威を振るうなか、フランスのノーベル賞作家、アルベール・カミュの『ペスト』が飛ぶように売れているらしい。カミュといえば実存主義やら不条理文学。爺も若いころ「異邦人」などを夢中で読んだが、「ペスト」は未読であった。そこで若干ミスターであるがこの度読んでみた。

物語は、フランスの植民地であるアルジェリアのオラン市を。ペストが襲い、苦境の中、団結する民衆たちを描き、無慈悲な運命と人間との関係性が問題提起される。医者、市民、よそ者、逃亡者と、登場人物たちはさまざまだが、全員が民衆を襲うペストの脅威に、助けあひながら立ち向かう。なお、この小説は架空のものであり、オラン市で実際にペストが発生したわけではない。実際にペストは14世紀から17世紀にかけて世界中でパンデミックを引き起こしている。この

小説はフランスのレジスタン運動の隠喩であるとも解釈されている。そもそも植民地というのは、経済的利益の搾取のために、他国による支配がおこなわれている場所である、その意味では、経済最優先である状況というのは現在とも共通している。

今回はこの小説「ペスト」の展開と現在の「新型コロナ」の現在進行形をクロスして、その哲学的テーマを共に考えていきたい。

(1) ペスト発生とコロナ発生

『ペスト』ある年の4月16日の朝、医師ベルナル・リウーは、階段で一匹の死んだ鼠につまずく。その後大量のネズミが路上に現れ、死んでいくのが発見され、役所はネズミの収集と火葬を始めた。静かな恐怖が市民たちを襲い、地元通信社は、対策の必要を訴え始める。『ペスト』2019年11月17日、中国武漢の医師が最初の新型コロナの症例を発見。しかし、当局はこれをひた隠し、結果的には遅れて31日中国WHOへクラスター発生を報告した。

『ペスト』リウーが暮らす建物で門番の老人が、高熱を発して死亡し、これと同様の症例が、オラン市内のあちこちに現れ、やがて、死者が増加する。リウーは、ペストの疑いに真剣に取り組もうとしない役所やほかの医師たちに対して、緊急の処置をするよう訴える。やつ

とのことで県庁に保健委員会を招集して貰う。しかし、知事は、真剣に対応しない。輿論を不安にさせないことを最優先に考えている。』

『ペスト』1月16日日本で初めての感染者発生。21日中国春節開始。23日武漢封鎖。2月2日WHO「インフォデミック」警告

『ペスト』も新型コロナもその発生は衝撃的なものだ。結果的にはどちらも世界規模の「パンデミック(感染爆発)」になるのだが、小説では限定された市内の様子が描かれている。しかし、どちらも「不安」や「驚き」の感情が先行し、医師リウーの言う「理性」「抽象」は見向きもされずに行政はその重大さを隠蔽しようとするのは今も共通している。また、弱者である老人が最初に倒れていくところはこれも現在の状況と同じである。さらに現実の世界では「パンデミック」に便乗した「インフォデミック」が起こり「差別」や「分断」が煽れた。現代のデジタル情報化社会は情報操作も容易である。

(2) 都市封鎖(ロックダウン)と緊急事態宣言

緊急事態宣言

『ペスト』そうしているうちに死者が急増し、市は突然閉鎖されて、外界から遮断される。『かれらは自分のことばかりを考えていたわけで、別の言い方をす

ればヒューマニストであった。つまり、天災などというものを信じなかったのである。』『そういうわけで、ペストがわが市民にもたらした最初のものは「追放」の状態であった。』『彼らはこのようにして、なんの役にも立たぬ記憶をいだいて生活をするという、すべての囚人、すべての「流刑者」の深刻な苦しみを味わった。』

『ペスト』2月5日ダイヤモンドプレスでクラスター発生。2月11日WHO「新型コロナを「COVID-19」と発表。3月11日WHO「パンデミック宣言」。3月23日「専門家会議」発足。3月24日東京五輪延期決定。4月7日「緊急事態宣言」

▽政府、行政の混乱はどちらも同じである。政治と経済の利害関係を押し量り、決断がずるずると延期されて被害が増幅する。そして特に「専門家」と言われる医学界にも同じような状況がみられ政治との癒着や責任回避などである。さらに現代のコロナでは統計的手法が「科学的」という理由で重視されている。それはSNSに個人の位置データや行動記録を利用している。いわゆる「デジタル資本主義」を科学がその「真実さ」を裏付けしている形になっている。「科学」の独立性も問われているのである。

▽『ペスト』では都市封鎖宣言後の状態を「追放」「流刑」と表現している。こ

れは、キリスト教とのかかわりが深い「原罪」を現わしている。日本でも、元都知事が東日本大震災の時に「天罰」といったがこれと同じようなことであろう。また、カミュはここでヒューマニスト批判を展開している。すなわち人間中心主義は人間が自然を支配する権利を神から与えられているというこれもキリスト教以来の思想の批判である。現代の自然破壊、環境破壊による暴走はウイルスの発生拡散に多いに関係している。また、西欧社会による「都市封鎖」と日本における「緊急事態宣言」での「自粛」はどちらも「自由の制限」に比べて大問題である。西欧は「臨時法」により、日本は「自己責任」による社会相互監視による「自由の制限」を可能にしている。そのどちらも重大な問題であること気づかなければならない。ワイマール憲法の「臨時法」はナチスの全体主義を許したし、「自己責任」による監視社会は哲学者フーコー「パノプティコン」という監獄施設概念である。後者は現在「自粛警察」や「マスク警察」「消毒警察」など「全員警察の全体主義」を作り出している。

(3) 「不条理」―「不安」に直面した人々の連帯が生まれる。

《ペスト》ペスト発生から4カ月がたち疫病の猛威が頂点に達すると恐怖や別離や追放の感情に人々は集団的に支配されていく。まず、やけになった一部の者

たちによる放火や襲撃、略奪が起きる。

そして感染防止の理由から死者の葬礼が禁止される。死者の数が多すぎていちいち葬儀をしていられない状況になり、やがて、親しい人の別離に苦しんでいたはずの人々が記憶も想像力も失ってそれに「慣れて」しまう。」

『医師リウーは、それこそがまさに不幸なのだと考えていた。絶望に慣れることは絶望そのものよりも悪いのだ。』

↓《コロナ》4月16日「緊急事態宣言」全国に拡大 13都道府県「特定警戒都道府県」。5月4日「緊急事態宣言」5月31日まで延長

▽「絶望に慣れる」とカミュの表現は「不条理」を意味している。「不条理」とは、この世界のありかたが、筋道が通っていない、ばかげたものだ、ということを意味している。しかし、そうした世界の不条理(例えば、戦争や疫病、自然災害)が人間から「自由」を奪って、何の罪もない人にすら死や不幸を与える。人間はそういう「不条理な世界」に無防備のまま裸で放り出されている。これがカミュの根本的な世界認識である。ペストもコロナの時代もこのもともと人間が置かれているこの「不条理」を浮き出しているのである。

《ペスト》『神父パヌルーは、博学で戦闘的なイエズス会の神父。教会を訪れる信者たちに対して厳格な説教を行い、「ペス

トは、オランの持つ罪に対する神からの罰である。悔い改めよ」と説教する。』

『数週間前からオランに居を定め、大ホテルに住んでいるよそ者タルーは、志願の保健隊の結成を医師リウーに提案する。』『下級役人で作家志望。小説の序文を直し続ける老吏グランも参加する。』

『普段パリで暮らしている若い新聞記者ランベールは、運悪くペストの流行に遭ってこの街のなかに閉じ込められてしまった。彼は、妻が待つパリに脱出しようとする。しかし、当局が許可してくれないので犯罪歴のあるコタールという人物と連絡を取り、密輸業者による違法な方法でオラン脱出を試みる。その彼も医師リウーの妻と病気療養中で離れ離れになっていることを聞かされ、考えを改め、リウーたちに手伝いを申し出る。』

『犯罪者で、逃亡者であるコタールは、オランの市民たちが混乱する様子を見て、恐怖に苦しんでいるのが自分一人でないことを感じ、混乱を喜んでいた。また、封鎖されたオランと外部との間で行われる密輸に手を出し、多額の富を貯えている。』

『リウーは言う「ペストと闘う唯一の方法は誠実さということ。つまり自分の責務を果たすことだと心得ています。』

『彼らを支えたのは、人と人をつなぐ「連帯の感情」であり、自分の職務を果たすことへの「誠実さ」と「義務感」

である。』

↓《コロナ》世界中の人々が同じ危機に直面しており、誰にとっても逃げ場はない。新型コロナウィルスの感染拡大で、私たち人類は「運命共同体」であることを、いや応もなく実感させられた。「苦境の今こそ、21世紀最大の課題である」国家を超えた連帯」を実現させるチャンスだ。しかし、現実は何程遠い。アメリカは「武漢ウィルス」といって中国を非難し「分断」を図っているし、国連機関であるWHOからの脱退も計画している。またワクチン開発後の各国の配分競争は激化して「国際協調」は皆無である。ウィルス自体は文明の外からやってきた脅威であるが、それが広がったのは、『グローバル資本主義』という社会システムが抱える負の側面、リスクが顕在化したからだ。社会や経済のシステムが国レベルで完結していた時代であれば、『封じ込め』は抜本的対策になりえた。しかし、現代の日本で感染拡大を抑えられても、世界中に感染が広がっている限り、封鎖による経済的打撃から逃れる方法はなく、五輪も開催できない。一国レベルで感染問題が解決しても、その国が幸せになるわけではない。『○○ファースト』は、ウィルスの脅威には通用しない。

▽人類の活動が地球環境を変える時代が訪れた、という意味の『人新世』という言葉がある。人類の力が自然に対して強すぎるため、気候変動で大災害が頻発

する。それにより自然への自分たちの無力を思い知らされる逆説が生じている。今回のパンデミックも、私たちが自然の隅々まで開発の手を広げたことで、未知の病原体という『自然』から手ひどい逆襲を受けている。

現在、すでに『封じ込め』では対応しきれない崩壊が世界で進みつつある。医療システムの崩壊、経済システムの崩壊、そして人々の精神面の崩壊である。

各国の医療現場で人工呼吸器の絶対数が不足し、高齢の重症患者と若い重症患者、どちらに呼吸器を優先的に装着するか、という「ジレンマ」選択を迫られる事態が多発している。人工呼吸器を若者に回さざるを得ないとの判断。それは苦渋の決断で、社会を維持していく優先順位では、ある意味で正しいとも言える。

しかし、その決断は『最も弱い立場にある人こそ、最優先で救済する』という、人間「倫理」の根幹をないがしろにしてしまうおそれがある。どちらを選択しても不利になるという「ジレンマ」はこの「倫理」よって回避されなければならぬ。それが、国境を越えた日常の場での「共感」「連帯」「義務」である。しかし、ペストの時代も現代も宗教の場は変化がないように思われる。それは「感情による共感」ではなく「理性による信仰」によるからであろう。『ペスト』で神父、パウルは人間の「原罪」を説教し、自らペスト症状を患っても医療を拒否し死んで

いく。ただ現代の宗教はその点都合よく科学と宗教を分離混合していて利益がある場合は躊躇なく科学を選ぶ。

(4) ペストの終わり、コロナは？

『ペスト』しかし、亡くなったパウル―神父を調べたリウー医師は、その症状が今までのペストとは異なることに気づく。そしてついにペストの大流行にも終わりが訪れたのである。『すると犯罪人コタールは、ふたたび自分だけが恐怖に苦しむことになるのを感じ、銃の乱射騒ぎを起こす。また作家志望のグランはペストで苦しんでいたが回復し、新しい人生を始めることを誓う。』『こうしてペスト流行が衰え始めたそのタイミングで、今まで医師リウーとともにペスト対策に奔走してきたタルーがペストに感染し、死亡する。』

『オランの市民は通常生活に戻っていた。しかしリウーは、ペストとの戦いは終わっていないという。ペスト菌の微生物は何年間も活動を休止したまま潜伏し、いつでも復活する可能性があるからだった。』

『医師リウーはこの記録が決定的な勝利の記録ではありえないことを知っていた。それはただ、恐怖とその飽くなき武器に対して、やり遂げねばならなかったこと、そして恐らく、すべての人々―聖者たりえず、天災を受け入れることを拒みながら、しかも医者となろうと努める

すべての人々が、彼等の個人的な分裂にも拘わらず、更にまたやり遂げねばならなくなるであろうこと、についての証言でありえたに過ぎない。事実、市中から立ち上る喜びの叫びに耳を傾けながら、リウーはこの喜びがつねに脅やかさされていることを思い出していた。なぜなら、彼はこの歓喜する群衆の知らないでいることを知っており、そして書物のなかに読まれることを知っていたからである

―ペスト菌は決して死ぬことも消滅することもしないものであり、数十年の間、家具や下着類のなかに眠りつつ生存することができ、部屋や穴倉やトランクやハンカチや反古のなかに、辛抱強く待ち続けていて、そしておそらくはいつか、人間に不幸と教訓をもたらすために、ペストがふたたびその鼠どもを呼びさまし、どこかの幸福な都市に彼らを死なせに差し向ける日が来るであろうということ。』

↓『コロナ』5月25日緊急事態の解除宣言約1か月半ぶりに全国で解除。6月2日「東京アラート」発令。7月13日WHO「多くの国が誤った方向に」事態悪化警告。世界の死者60万人超、国内1000人超。7月22日「G.O.T.O.トラベル」キャンペーン開始。

今回のパンデミックが終息したとしても、新たな未知の感染症が発生し、広がるリスクは常にある。日常生活の背後に『人類レベルの危機』がいつ忍び寄るか

分らないことを、私たちは知ってしまった。それが私たち自身の政治的選択や行動に大きな影響を与えるかもしれない。人間は『まだなんとかなる』と思ってい



大塚典駆道(33)

下村嘉明

今年は、疫病神に狙われている。半年で3回入院し2回も手術を受けた。コロナで大変な時に3回も病院にお世話になったのである。想像も出来ないことが起きるのが人生と言える。今回、声帯のポリプを切除し検査機関からの結果待ちにはずいぶん気をもんだ。医師から多分ガンではないと言われていても、結果が出るまでは安心できない。

手術前から低カロリーの病院食、そし

て絶食、三分粥、五分粥、二週間はモノを言うな、発声をするなどということである。とにかく腹が減って仕方がないが間食禁止の指示が出ていたので、今回は家内からの差し入れも断り空腹に耐えた。入院して差し入れ無しは初めての体験であった。

手術自体は割と簡単で一時間ほどで終わった。術後の痛みもなくモノが言えない不便さと空腹感に耐えるぐらいであった。コロナの影響もあり面会禁止なのだが、事情があるのか家族が夜の9時過ぎまで病室にいて話し声が聞こえるのが気になった程度で入院生活は快適であった。同じ相部屋だった92歳の爺様も発熱しコロナを心配した家族が救急車を呼び病院に入院させた様子で、爺様は早く退院したいといつも看護師に言っていた。

私は、手術後三日目に退院を言われたが、モノを言っていない状況では退院したくないので、一週間延ばしてもらった。婆さんの介護もあるからしゃべらない事が不可能だからだ。私は、仕事はしていないが婆さんの介護は付いている。入院中はシヨート・ステイにあずかってもらえたので助かった。

今回の入院では、ガンの検査待ちの病人の気持ち少しは分かった。声帯にガンが出来れば、モノが言えなくなる可能性がある。普段は当たり前のようにしゃべっているが、しゃべらないことは非常に不便である。たった二週間でも根を上

げるぐらいだから。

三回も入院を繰り返して、二回も手術して分かったのだが私の体調は良いという事である。確かに難病を抱えてはいるが、血圧や血糖値等は正常だしすぐに手術出来る。

阪大病院に入院した当時の体調はひどかった。血圧も高く血糖値も高かった。第一に体重が90キロを超えていた。退院後100キロ近くまでになった。これを時間かけて運動して減らしてきた結果がすべて良いほうになったと自己満足している。もし、100キロ近い体重で転落していたら、もっと重症になったに違いない。また、血圧が高く薬を飲んでいればすぐには手術が出来なかったかもしれない。幸い、不幸中の幸いというか、それなりに収まったというのは日々の運動のお陰だと考えている。

しかし、退院すれば煙草も吸うし酒も飲む。相変わらずの生活態度であるから何をかいわんやではある。七十才を目前にして疫病神に見舞われるとは思わなかった。友人は、病气やけがは、死に行くための訓練だと言った。確かに病苦を多く経験することは、悪い事ばかりではない。六十才の時に筋炎になり六九歳で硬膜下血腫、声帯ポリープと立て続けに入院、手術を繰り返して体力も落ち老いていくわが身を見ると確かに死に向かつて一直線だという時の流れを感じずにはいられない。

私の甘さを知りつつも、まあここまで元気にやってこれたのだから、いいじゃないか、という諦めと無力感が漂うが、日々の運動を続ける事だけはやめないうもりだ。野垂れ死にを実現するのは、なかなか大変な努力がいることが身に染みている。安易な気持ちでは、野垂れ死には出来ない。

大人の今昔物語(70)

石川 吾郎

今回はあだ名にまつわる笑話をご紹介します。子供でも楽しめる話なので、教科書に出ない度は一／五。

左京の大夫にあだ名がついた話(巻第二八 第二一)

今は昔、村上天皇の御代に、古くからの宮様の家の御子で、左京の大夫何某という人がいた。背がひよる長く、非常に上品な様子だったが、その姿形はおかしかった。

頭はサイツチ頭だったので、(冠の後ろに垂らす装飾の)纓(えい)が、(普通は背中に触れるのだが)背中につかずにゆらゆら揺れていた。顔色は青いツユクサの花を塗ったように青白く、臉は黒ずんで、鼻は高く突き出て色は少し赤かった。

唇は薄く色はなく、笑うと歯がやけに目立ち、歯茎が赤く見えていた。声は甲高い鼻声であった。その話し声は家じゅうに響きわたった。歩くときには背中と尻がゆらゆら揺れた。この人は殿上人であったが、顔色が目立って青かったため、みなはこの人を青経(あおつね)の君とあだ名を付けて笑い合った。

とりわけ、血気盛んな若い殿上人たちは、この青経の君を、何をすることにつけて、手ひどく笑いものにしたので、天皇もこれを聞きになり「殿上人たちがこれに笑いものにするのは、たいそう不都合なことだ。彼の父親の親王がこれを聞けば、私がこのように制止しているのも知らずに、私を恨むようにもなりかねない」と仰せられて、真剣に腹を立てられたので、殿上人たちは皆、舌打ちをしてこの後は笑わずにおこうと互いに言い合ったことだった。

こうして誓いを立てた。「このようにも天皇さまのご機嫌を損ねてしまったので、今よりのちは決して「青経」と呼んではならない。もしこれを誓ったあとに、「青経」と呼んだ者には罰として、酒肴果物などを皆に振舞わせるようにしよう」と約束をした。

その後ほどなくして、堀川の(藤原)兼通の大臣が当時、中将でいらしたが、この誓いをふと忘れて、この人が通り過ぎる後ろ姿を見てうっかり「あの青経丸は

どこへいくんだろう」と口走ったのを、殿上人たちは聞きつけて「誓いを破ったぞ。約束通りに罰として、早々に酒肴に果物を取りにやらせて、償いをしておくれ」と、みんなで言いはやす。堀川の中将は「いやだ」とはじめは拒否をしていたが、殿上人の仲間が集まって責め立てるので、「しかたがない、青経と呼んだことの贖いは明後日にしよう。その日に殿上人と蔵人は、できるかぎり集まりたまえ」と、御所から帰宅していった。

その日になって堀川の中将が、青経の君と呼んだ償いをしてけると、殿上人たちはこぞって参集した。人々が殿上に居並ぶほどに、堀川の中将の直衣（なおし）姿は、まるで光かがやくようで、魅力あふれんばかり。表現できぬほど素晴らしい芳香を放ちながら姿を表した。素晴らしい直衣の裾からは、青い相（あこめ）をのぞかせていた。青い色の指貫（さしぬき）を着ている。四人の隨身にも皆青い狩衣袴・相を着せていた。その一人には、青く彩色した折敷（おしき。方形の盆）の上に、青磁の大皿に青いコクワ（サルナシの実）を大盛にしたものを捧げ持たせていた。また一人には、青磁（せいじ）の瓶に酒を入れて、青い鳥の子紙でその口を包んで持たせていた。また一人には、青竹の枝に青い小鳥を五つ六つばかり付けたのを持たせていた。こういったものが清涼殿の殿上の間の沓脱あ

りから御殿の前に次々に現れたので、これを見た殿上人たちは、みな大笑いしたこと、甚だしい。

このとき、天皇がこれを聞かれて「これは何を笑っているのだ」と、尋ねさせられると、そこにはべる女房は「兼通が青経と呼びましたので、そのことを殿上人たちに責められ、その贖いをしておりますのを見て、みなが笑い合っておりますのでございます」と申し上げる。天皇「どのようなして贖っているのじゃ」と、直々に（清涼殿の中央の）昼の御座にお出ましになり、小部から覗き見られると、兼通の中将が、我が身からはじめ、隨身もみな青い装束を身に着け、思いつくかぎりの青い食べ物を持たせて参集しているのをご覧になられ、天皇自身も可笑しがられ、お腹立ちもなく、大いにお笑いになった。その後は、本気になってお怒りになることもなかったため、殿上人たちは、ますます大笑いしあったことだ。

というわけで、青経の君のあだ名は公認となったのだった、と語り伝えられている。

《コメント》

コロナ禍で、何かとストレスの多いときなので、今回は笑えるものを選んでみました。

この話、どこかで聞いたことがあるなあ

とよく考えてみたら、そう中学か高校の教科書に出ていたものでした。もともとそれはたぶん「宇治拾遺物語」に出てくる、これとほとんど同じものだった気がします。

兼通の青いもの尽くしのしゃれっ気は、たいしたもので、大物ぶりを思わせませう。ここに登場する青磁の皿の上に盛られた、サルナシの実というコクワには特殊な漢字（草冠に人偏に巨）があてられていますが、これもきつと青っぽい実だということですが。

藤原兼通は、この話の当時は中将ですが、その後関白太政大臣にまで登り詰めることになります。藤原道長の伯父という関係になり、藤原家の隆盛の上り坂にある頃の雰囲気をよく伝えていると思えます。

新型コロナウイルス禍愚考（その4）

明石 幸次郎

新型コロナウイルスの感染が拡大して、見方によれば、気候変動と共に人類はとてつもない危機に直面しているとある学者は警告しています。

人類史は「見える敵」と「見えざる敵」との戦いの歴史であったとも言われ、その見えざる敵とは、さまざまな病原菌や

ウイルスとの戦いを続けてきて、それは、ペスト、結核、天然痘、コレラ、スペイン風邪などが上げられます。

日本は、このスペイン風邪は、1918年（大正7年）8月頃から始まって、1920年（大正9年）8月頃まで続きましたが、年が過ぎると自然に沈静化しましたが、その間、当時の人口5600万人の内、45万人が死亡したといわれています。沈静化したのは、丸2年かかり、その間には3回の流行があり、当時の内務省、自治体の方針、政策は何と、今と変わらざマスク着用、患者の隔離、学校の休校、人の大勢居るところに立ち入るなであったようです。このスペイン風邪を引き起こしたウイルスが3回で日本の隅々まで拡大して、感染の拡大が限界を向かへ、それでスペイン風邪に罹り、又、生き残った人達が免疫抗体を獲得して沈静化したといわれています。

100年前と比べ、医学、医療は飛躍的に進化して、ウイルスから守るワクチンの開発も進んではいますが、パンデミックは1回押し寄せただけでは、足らず、第1回で感染しなかった者や感染の少なかった地域を狙い打ちにするかのように、第2、3回と発生する可能性があるように、これはスペイン風邪の経緯から学び取れる重要な教訓であると専門家は言っています。

にも関わらず、現在（8月4日）第2回目のパンデミックが来ているとも言われていますが、政府はGO TOトラベル

キャンペーンを前倒しで実施したりして、経済立て直しという名目で、多額の税金を投入して、国民を煽りたて、実際は、観光事業者とそれを企画した会社救済に軸足を置いたようで、コロナ感染防止への強い姿勢は伝わってきていません。

結局は、医療を含めた社会環境と国民の個人の自覚ある生活がいまってこの新しい「見えざる敵」との戦いに勝つ事ができるのでしょいか？

このウイルスとの戦争ではありませんが、日本には先の大戦時のようなタイプの首相がいて(自分の都合の良い情報だけを取り入れ、都合の悪い情報は無視か理解しない。身内意識が強く、言い寄ってくるゴマスリには弱い)コロナ禍での国の補償とその経済対策費は世界トップレベルと自画自賛して、実際は中国から緊急輸入した高いコストの中途半端で品質の悪いマスクと、方針が二転三転した10万円の給付金だけで、(自営業者、法人には持続化給付金、家賃支援給付金などが出るが)国民に戦えと言ってるようなものです。

そういう状況の中で、京大の山中伸弥教授は、思い余ったのか、自らのホームページの中で、ご存知の方は多くおられると思いますが参考までに(4月22日付提言) 5つの提言をなされています。

提言1. 自分を周囲の大切な人を、そして社会を守ろうとして、4つの行動が求められる。1. 人と人との接触を減ら

す 2. 社会を支える方々への敬意と感謝 3. 感染した方への思いやり(偏見、差別は無意味) 4. 休業を余儀なくされた方々への支援。

提言2. 医療体制を整備し、医療従事者への偏見をなくし医療崩壊を防ごう、無症状・軽症者用施設の拡張、医療従事者の感染と過重労働から守る

提言3. 目的を明確にした検査体制の強化 PCR検査は今の10倍、100

倍と検査体制を増やす必要がある。(因みに、私のドイツに住んでいる小1の孫はメルケル首相の緊急事態宣言から直ぐに週に2回、無料でPCR検査(唾液検査)をやっているとの事です。日本では、こ

こまでは期待しないが、段階的にも希望者に安いコストで、PCR検査が出来るのか? 安倍首相が全力を尽くしてPCR検査の拡大を図ると言ってからもう4ヶ月以上も経ちますが!

提言4. 国民への長期戦への協力要請と適切な補償性がある。

提言5. ワクチンと治療薬の開発に集中投資 国産の開発を進めなければ、アメリカ等でワクチンや治療薬が開発されても、供給が遅れたり、高額になる可能性がある。 以上

しかし、政府のやっていることは、トランプからの脅しで、欠陥品のイージスアシヨアーなど的高額兵器を買われ、又、山中教授の提言とは裏腹にアメリカのファイザー社が開発しようとしている

予防ワクチンを国内向けに6千万人分の供給を受けることで基本合意したと、西村コロナ対策担当大臣と同じ匂いのする元財務官僚の加藤厚生労働大臣が胸を張って、7月31日に発表しています。開発に成功し、承認した場合、来年6月までに日本で供給されると思いますが、そのコストは幾らで、何故、6千万人分の説明はありません。又、マスコミも何故か、これを追求しないで、政府の一方的な説明を伝えるだけで終わっています。誠に不思議なことです。これでは、このコロナ戦争の中で、まさに大本営発表を鵜呑みにした報道です。べらぼうな金額と予想されるコストは、軍備費を増大と同様に無駄なマスク代も含め、将来の増税という形で国民につけがまわってきます。

さて、3月20日の政府の自粛要請が出て、中学3年の毎年やっているクラス会、花見、納涼会も出来ないということで、クラス会の幹事が提案して同じクラスの男5人、女6人でLINEで自粛期間中は繋がるうということをやりました。

内容と言っても、女子は日常の井戸端会議の延長で自分の庭にどんな花が咲いたとか、明石公園散歩したらバラ園の花が奇麗だとか取り留めない話題で盛り上がり、男子は、女子力?の高い奴が、魚を釣って料理したとか、家庭菜園で採れた野菜や、それで作った料理の写真を送

ってきたり、それを女子が絶賛したりして、ウチの旦那はそんなことをしたことがない。3度3度食べてばかりや!だとか、ウチの旦那もそうや!〇〇君はエライ、奥さんは幸せや!又、ウチの旦那は、この自粛にも関わらず3日に1度欠かさずゴルフに出かけているとか、96歳の義父がなくなり、今年は初盆だとか、うちも94歳の義母が亡くなり、肩の荷が下りたとか、別の男子は、母校の明石商業が夏の高校野球の優勝候補にも関わらず大会が無くなるので、可愛そうだとかで盛り上がり、私にも毎日そういったLINEが来ます。私以外は皆地元に住んで、その地元愛のメンバーばかりで、大阪にいる私は別にLINEで伝える事はないので、1ヶ月ばかり放っておきました。

私だけがLINEでの近況報告がないということ、幹事の女子から「明石君、LINE見てるの?元気でやってんの?あの電話のボランティアはまだ続けていの?どうしてるん?ひよっとしてコロナにでも感染したんと違うのん?」というLINEが入った。仕方なしに「見ているよ!みんな元気で幸せや!ボランティアは、コロナに脅えながら週1回程マスクして電車に乗って行ってます。しんどい話ばかりを3時間以上聴いて、しんどくなるので、真直ぐに家には帰れまへん。それで、頑張ってる飲み屋のおばちゃんのお店で、一杯飲んで、憂さを晴らしてから?家に帰ってますよ!」と

LINEしたら、女子力の高い奴から「明石君、君は本末転倒のことを、やっている。大丈夫か？奥さんは大丈夫か？君の家庭が心配やー」と真剣に？LINEで反応を返して来ました。冗談で言ったつもりがLINEは軽い冗談も伝わりません。それから、何人かの女子も明石くんが心配やとLINEを戴くようになりました。

本末転倒とは、私が一杯飲むために電話相談をやっているように感じたようで、LINEも電話も表現で誤解されることがあるのだと、少し反省している次第であります。因みにこの男子とは小、中、高校と一緒でありましたが、友人と呼べる程の関係ではありませんでした。

オクラの山たより (47)

困了生

一

上方の落語に「京の茶漬け」という演目があります。京に仕事でやって来たお客さんが用事をすませて帰ろうとする時、家の人から「時分ですから、お茶漬けでも……」と声がかかります。「ははあ、お茶漬けが出るのかな」と客は思いますが、これが出たためしがありません。「お茶漬けでも……」はあくまでも愛想言葉。これを聞いた方も「いえいえ、お

言葉だけでお茶請けよばれたのも同じですわ」と言葉で返すのが京の常識。いつ出てくるかとずっと待っている。「何という非常識な人や。人の家の飯くろうて帰ろうなんてあつかましいにもほどがある。」と陰口をたたかれることとなります。落語「京の茶漬け」は、この誰も食べたことのない「京の茶漬け」を「いっぺん」とことん食うてこましたら」と京にやって来て大騒動を引き起こす大阪人の話です。口先では良いことを言つて裏では陰口をたたく、京の人は底意地が悪い、などと関東などの人の間でいわれる時につかわれる話です。

このような京の人への悪評は近年にわかに起こったものではなく、かなり古くからあったようです。

作家の司馬遼太郎氏が次のような話を随筆の中で紹介しています。時は戦国末期。織田信長が上洛してきたときのこと。

料理の腕がよく作れぬ料理はないと京で評判であった坪内某に信長は料理を作らせた。最初に出されたのは薄味の京料理。信長は「水臭くて、まずい」と怒ったので、一日の猶予をもらって一考した料理人坪内某はかなりの量の醤油を鍋に注いで濃い口の料理を信長に差し出しました。案の定、信長は「これは、うまい」と大満足。坪内某は「田舎侍は料理の善し悪しも分からぬ」と薄ら笑いをしたとか。この話はずっと江戸時代の「常山紀談」にある話ですが、「常山紀談」は戦

国時代の逸話がおもしろおかしく書かれた書で記述の内容が史実かどうかは議論のあるところですが、この真偽はともかく京都人の底意地の悪さの評判は近世以来のもの、ひよつとしたら中世以来のものといえそうです。

この「常山紀談」が世に出たのは一七七〇(明和七)年。この年、五十五歳になった蕪村は夜半亭を継承しています。友人の嘯山が「遅桜 人に待たれて 咲きにけり」と詠んだように遅咲きの立机(りつき)俳諧の宗匠となること)でした。

この時期から数年後に書かれた蕪村の書簡に今まで書いてきたような京都人の底意地の悪さに対して激しい怒りをぶちまけたようなものがあります。すでに京都に暮らして二十年近く、京の人の気質には十分に慣れたはずのころでしたが。

二

詳しい事情はよく分からないのですが若い几童に対する夜半亭の仲間うちで陰口がささやかれているという噂を聞いた蕪村がその怒りを述べています。

御細書、御厚意のおもむき相心得候。しかし、はなはだ解(げ)しがたきことに御座候。社中にさような不平をいだき申され候仁(ごん)、たれにて候や。おぼつかなく候。巴人などの集いたさ

れ候にも、未巻はのこらず野子(やし)と相談、もちろん巴人独吟は一々野子に相談いたされ候。その頃は野子もいまだ廿五六歳の時にて、未練に候へども、巴人すいふんと片腕のごとく相談に及ばれ候。いわんや貴子は俳諧の呑み込みはなはだよろしく、京師におゐて外々(ほかほか)へ相談いたす所存はこれなく候。されども、自慢をするの、大言を吐くといふ筋にはいたらぬ事に候。いかなる様子に候や、とくと承り届け申したく候。社中の存念にかなはぬ事も候はば、了簡(りようけん)もこれあり候。何かにつけ京師の人心、日本第一の悪性(あくしょう)にて候。日頃はさも存ぜず候所、俳諧をはじめて候ひて後、つくづくと思ひ合わせ候ことども多く御座候。およそ日本過半は行歴いたし、人心の善悪も掌をさすがごとくにあきらめ申しお候。

「細書」は詳しく記した文書のこと。「社中」とは夜半亭に集う俳諧仲間のこと。「巴人」は蕪村の師で夜半亭一世主人であった宋阿のこと。「野人」は謙称で蕪村自身のこと。「未巻」は「未完成の、添削を経ない連句の巻」のことで「未練」は「未熟」の意。「了簡」はしかるべき処置をする、の意。「俳諧をはじめて候ひて後、つくづくと思ひ合わせ候」とは「明和七年に蕪村が夜半亭を継いで、他の在京の俳諧宗匠たちと付き合うように

なつて実感した」という意か。「あきらめ」は「はつきりと認識した」ということ。

書簡の大意は「夜半亭の仲間の中で誰が几董に対する不平不満を言っているのか。自分（蕪村）も若い頃、師の宋阿が集などを出さないには師匠からなにかと相談を受けながら作業をした。ましてや几董は俳諧の呑み込みも早く京にあつては他に相談する人もいないほどだ。自慢をしているのだの言壮語をしているなどというのはまったく当たらない。どのような不満を陰で言っているのか。この耳で聞きたいものだ。もし夜半亭の仲間のルールにはずれることがあれば自分にも覚悟がある。本当に京都の人の性格の悪さは日本一だ。私は全国を歩き回って日本中の人の心は全部知っているんだからね」といったものでしょうか。

たぶん蕪村が几董の才を愛でてあれこれと相談するのを夜半亭に集う他の俳人たちが嫉妬して陰でこそこそと不平不満をいっているという話を蕪村が聞きつけたのでしよう。互いに顔を合わせたときには相手を喜ばせるような振る舞いをするが、いったんその場を離れば陰で何を言っているのか分からない、面従腹背・人面獸心とも思える性格の悪さ。「何かにつけ京師の人心、日本第一の悪性（あくしょう）にて候（何かにつけても京の人の心は日本で最悪のものです）」とはよく言ったものです。

江戸とは違い京での夜半亭の運営にか

なり苦労していたのではないのでしょうか。すぐ後に書かれた「日頃はさも存ぜず候所、俳諧をはじめて候ひて後、つくづくと思ひ合わせ候ことども多く御座候。（日頃はそのようにも感じないのですが、京で夜半亭を継いでからは、つくづくと京の人の心は『悪性』だと合点することが多くございました）」という言葉はそのあたりの事情をよく伝えているようです。「およそ日本過半は行歴いたし、人心の善悪も掌をさすがごとくにあきらめ申し候。（日本のおおかたを歩きめぐった私は全国の人の心の善し悪しはよく分かつていますからね。）」という言葉はまさしくため押しの一言とでもいうべきものでしょう。

三

「京の人はこれだから……」といった不満というよりも京にだまされたといふべき蕪村の言葉をひとつ。一七七六（安永五）年五月二日付の蕪村六十一歳の書簡です。宛先は名古屋の俳人井上士朗。京に暮しはじめてすでに二十五年がたっています。士朗宛の書簡の末尾に句を付けて自注をつけています。

ほととぎす 待つや都の そらだのめ

右の句は京の実景。愚考、京に住む

こと二十有余年、杜鵑（ほととぎす）

を聞くことわずかに二度。

句意は「都のホトトギスの声を今日こそは、今夜こそは聞けるだろうと人に期待させといて、いままですつと空振り続きだった。これこそ都の空の『そらだのめ』というものか」でしょう。ホトトギスの声は「テッペンカケタカ」と聞こえるらしいのですが、京都近郊に暮らしてすでに三十年以上経つ私も聞いたことは一度もありません。

それなのに「百人一首」にある藤原実定の歌に

ほととぎす 鳴きつる方をながむれば
ただ有明の 月ぞ残れる

とあるようにホトトギスの鳴き声は多くの和歌の材料に取り上げられています。

しかも、和歌の中で鳴くのは実定が詠うごとく夜明け時分です。鳴き声を聞こうと待ちに待って「あ、鳴いた」と思った瞬間にはもうその姿はない。と、ホトトギスはそのような鳥だと多くの和歌に詠われてきました。当然のことながら古典に詳しい蕪村です。京ではホトトギスの声をふんだんに聞けると期待していたのでしよう。しかし、二十余年の間でわずかに二度。あんまりではないか、という蕪村の気持ちはよく分かります。

聞くところによると、ホトトギスは晩春初夏のころ、山野に卯の花が白く咲き

満ちるころに南の方から飛来して、山地に落ち着くとさつそくウグイス、モズ、

ホオジロの巢に托卵（他種の鳥の巢に産卵し、その鳥に雛を育てさせること）するそうです。そして、秋の立つころ、ホトトギスはインド、マレー半島、スマトラ、ジャワに向つて飛び去っていくとか。初夏から梅雨どきにかけて空に一声鳴いて人の心に悲痛な思いをかき立てるホトトギスが我が国にいる期間はさほど長くはないのです。とすれば、ホトトギスの声を聞くというのはかなりラッキーなことだといえます。蕪村の悔しさもちよつと的はずれか。

このように蕪村を悔しがらせたホトトギスですが、伝統的な詩歌でよく詠われたこの鳥を材料に蕪村もいくつかの句を作っています。例えば次の三句。

- ①ほととぎす 平安城を 筋違（すじかい）に
- ②筋違に 上京過ぎぬ ほととぎす
- ③ほととぎす 琥珀の玉を ならしゆく

①の句はよく知られた句です。「肅然と闇の中に沈んでいる京都の町。突如その中にホトトギスの長く続く鋭い啼き声があった。はつとしてその方角を見たが、ただ平安の都をはずかい方向に引いた声が残るばかりであった」というのが一般的な句の理解でしょう。京の人にいわせると京のホトトギスはすべて丑寅の方角にある洛北の山々から飛来し、そして南西

の方角へと飛び去っていくとか。碁盤の目状の京の町並みの、その直交する街路をホトトギスが斜めに飛んでいくというのが句の趣向です。

「平安城」と京の街を漢詩風の言い方をするので、鳥瞰図というか、あたかも天から見ているがごとく感じられるようにしています。また「筋違に」という言い方で、消え去りつつあるホトトギスの声の余韻を伝えようとしています。以上のことよってホトトギスの鳴き声が京の町全体に響き渡るものとなっています。

②の句は「ほととぎす平安城を筋違に」の別案ですが、「上京過ぎぬ」では、ホトトギスの声が京都御所あたりの地域、しかもそこは公家さんやら豪商やらの富裕層が住む地域ですが、そういう限られた階層の人たちのものとなってしまい、句の面白さも半減します。面白くありません。

①の「ほととぎす平安城を筋違に」の句の解釈で気になるのは内藤鳴雪の説です。「詳しい説明を要しませぬ。唯ほととぎすが京都の空を筋違に鳴いてわたった、といふだけのことである。しかしいかにも大きい景色で、よほど趣味のある句である。かような句は一物において精細なる趣味を詠ずるのは反対で、ほととぎすの形とか声とかいふ方には切実ではな

い。唯大きくぱつとした所に趣味があるのである……。」

「蕪村句集講義」1974年刊 から

ホトトギスは伝統的には「声」が注目されてきたのだが、この句ではホトトギスの声ではなく京の街を「大きくぱつ」と蕪村がとらえ描いた点を評価すべきだといふのです。この説にいささかでも私が心ひかれるのは

夏山や京を尽くし飛ぶ鷺さきひとつ

という蕪村の句があるからです。「夏山」とはおそらく東山でしょう。東山のどこかに立って見下ろすと一望にして京の町が見渡せます。と、一羽の白い鷺が青黒い夏山のかげから飛び立って、京の町の上を飛び尽くして遠くへ消え去っていったといふのです。もし、この句を一幅の絵にしたら、その絵は広大な空間を感じさせる作品となったに違いありません。

「ほととぎす平安城を筋違に」への一般的な解釈はホトトギスの鳴き声に驚いて見上げると飛び去っていく声の余韻が聞こえるだけ、なのですが、京の町の空間を描いた句だと鳴雪はいっているのです。

蕪村は東山のどこかで京の町を見下ろしています。突然、一羽のホトトギスが鋭い鳴き声をとんでゆく。その方向にあるのは広大な京の町、というわけです。

京の町に響き渡るホトトギスの声か京の町の広大な空間を見下ろす鳥瞰図か、と問われれば私は鳥瞰図の方に魅力を感じますが、いかがでしょうか。

四

「ほととぎす平安城を筋違に」は京の町を見下ろした鳥瞰図のような大きな絵画となる、といいましたが、③の句「ほととぎす 琥珀の玉をならしゆく」はそうした空間描写の句ではありません。句意はホトトギスが琥珀の宝玉のような音をたてて鳴きながら飛び去っていった、といふのですが、「テッペンカケタカ」という鳴き声が消え入りそうになりながらもずっと続いていくような趣がありま

鉢たたきの声があちこちで聞こえていたがついに自分の家に帰って行くようだと、家の中で聞いていた蕪村は鉢たたきのわびしい姿とその貧苦に満ちた生活を描いています。微妙な音の移りゆきをじつと聞いている蕪村です。

そして⑥の句は菜の花畑の向こうにある海の波の音が昼ひとしきり聞こえていたが、いつの間にか聞こえなくなった、という内容です。それだけの内容ですが、波の音が時間の流れと重なり、その時間の流れが意識の流れと重なって、その音をじつと聞いている人の存在を際立たせます。次第に消えていく音の移ろいが不可思議な時間の流れの世界へと吸い込まれていく。その時間を描こうとする作者。蕪村の句の一つの理解です。

ほととぎす 琥珀の玉をならしゆく

す。ホトトギスの鳴き声による時間継続の表現ともいえそうです。音の詩とでもいうのでしょうか。詩歌を作るような人は誰もが感性豊かですが、蕪村は特に音に敏感な俳人であったらしいのです。たとえば次の三句。

- ④雪の暮鳴(しぎ)はもどつて居るような
- ⑤ついに夜を 家路に帰る 鉢たたき
- ⑥菜の花や 昼ひとしきり 海の音

④の句では蕪村は静かな雪の暮に、いつの間にかもどつていた鳴の羽音にじつと耳を傾けています。

また、⑤の句では年末に門付けを行う

は玲瓏なる音の流れ行く情景の句です。しかし、決して絵画的な句ではありません。微妙な音のなかに不思議な時間の流れをかき取って句とした作品です。「人は目によって空間を意識化し、耳によって時間を意識化する」という認識から出発して時間意識の根源に迫ろうとした西欧の哲学者がいましたが、移ろい行く音を追う蕪村は我知らずそのような心のうちにある時間意識の根源の位相を我々に示しているのではないか。そう考えると

埋み火や つるには煮ゆる 鍋の物

一七七二(明和八)年 蕪村五十六歳の句

という句も新鮮に思えてきます。白く灰に埋もれた火にかけておいた鍋の物がいつしか煮えてグツグツと音を立て始めている、というだけの句ですが、「終には煮ゆる」音をじっと聞きながら時間の流れを感じている蕪村の丸まった背中が見えるようです。

周囲の音を敏感に感じ取る蕪村、その音の移ろいに時間を重ね合わせて行く蕪村。そんな蕪村には「テッペンカケタカ」と啼きながら飛び去っていくホトトギスは格好の句の材料だったに違いありません。

ただし、彼は京では二十一年間に二度しか本物のホトトギスの声を聞いていませんでしたが。

五

最後に、この文章を読んで「京都嫌い」蕪村といったイメージを持たれたかもしれませんが、それは筆者の筆のすべりであって蕪村は決して根っからの京都嫌いではありません。

最近、国際日本文研究センターの所長である井上章一氏は「京都ざらい」という著作で有名になりましたが、この本を売っている本屋さんのポップ(小さな宣伝用の掲示板)がおもしろい。そこには

「ほんとうは、好きなくせに」とありました。井上章一氏は「私は嘘つきにされた」と、別の著書で怒って見せていますが、やはり筆者の見るどころ本屋の店員さんの方が一枚上手のようです。蕪村も同じこと。俗にいう「嫌いだ、嫌いだと言いつ張りほどに好き」ではないでしょうか。京に住む友人宛の次のような書簡も残っています。

今日は家内の者ども、紛者の伊達にて、芝居にまかりこし、愚者一人、俊寛以来のあわれ御推量くださるべく候。かかる時節に天よりふれかしと願ふこと候。

一七七六(安永五年 蕪村六十一歳)以降

「家内の者ども」とは蕪村の妻ととも一人娘のくのこと。「紛者の伊達」とは金持ちぶった贅沢のこと。芝居の見料は當時かなりの高額でした。「愚者」は蕪村自身のこと、「俊寛」は孤島の喜界ヶ島に一人取り残された僧のことで芝居見物に出かけた家族に一人見捨てられたような気分をいっています。妻と娘に置いておかれて私は絶海の孤島に一人残された人のようにだ、といっているのは蕪村独特のユーモアだといっているでしょう。この寂しさから「今日、遊びに来てくれたら、とてもうれしんだけど」と友人に哀れみを乞いながら懇願している様子は、とても京の人に怒りを感じているようには見えません。やはり、すっかり京都の町

になじんで京都ライフを楽しんでいたのではないのでしょうか。



隠された歴史(22)

満田正賢

前回まで日本書紀の最後を飾る持統紀の直前、斉明・天智・天武紀に隠された歴史の真実を追ってきました。それは教科書に載っている日本の歴史とは全く異なるものでした。その理由は、日本書紀編纂の目的が万世一系の天皇家による日本統治の歴史の創作にあったからです。日本書紀の記述を理解する場合、どんな記述を正しいと考え、どんな記述を疑ってかかるべきなのかという基準をもつ必要があります。すなわち、万世一系の天皇統治の歴史という基準から少しずれている記述は真実に近いものであり、反対に万世一系の天皇統治の歴史を作り上げている記述については疑ってかかるべきであるということです。このような立場で、今回は欽明紀を探ってみます。欽明天皇は、応神五世の孫という傍系の継体

天皇と、仁賢天皇の娘の手白香(たしらか)皇后との間に生まれた嫡子です。欽明天皇が、安閑・宣化という継体の先妃の子の即位の後に即位したことによって天皇家の系図が正統に戻ったとされます。継体天皇は実際には入り婿ではなかったかという人もいます。まさしく欽明紀は万世一系の天皇家の歴史を作り上げているものです。

しかし同時に、欽明紀は日本書紀全体の中で最も不可思議な巻であると言われます。それは膨大な欽明紀の八割近くを百済との交流関係を中心とした朝鮮半島記事が占めている為です。確かに百済の交流相手としての「日本天皇」は頻出します。しかしそこに記された日本天皇の記述は、筑紫にいた人物、私の考察に依れば宣化天皇の子が那津官家に遷都し、倭の五王・磐井と続いた倭国(前期九州王朝)を乗っ取った後期九州王朝の王の存在を証明する記述です。今回はこの百済との交流記事を避けて、欽明天皇自身の動向を記した記事、近畿にいた勢力に関連する記事に焦点をあてて考察します。本来ならば万世一系の天皇家の系図の中心となるべき欽明天皇自身については、実は日本書紀を読んでもよくわかりません。第一に、欽明天皇の幼名が記されていません。応神天皇「誉田別(ほむたわけ)皇子」以降歴代天皇の幼名は日本書紀に記されています。例えば継体は「男大迹(をとど)王」、安閑は「勾(まがり)

大兄皇子」、宣化は「檜隈高田（ひのくまのたかた）皇子」、敏達は「詠語田（おさだ）皇子」、用明は「池辺（いけのべ）皇子」です。欽明天皇以外に幼名が不明な天皇はいません。欽明天皇の場合は継体紀の欽明出生の記述も、欽明紀自体もすべて「天国排開広庭（あめくに おしはらきひろにわ）天皇」という天皇名（和風諡号）で記されています。

第二に、欽明天皇の生年が不明である点です。欽明紀には即位時の記述も崩御時の記述も「時年若干」と記されています。欽明天皇は継体天皇が五十八歳で即位後に手白香皇女を皇后に迎え出来た子です。欽明紀には「（継体）天皇、愛（うつくし）びたまひて、常に左右に置きたまふ」と記されていますが、岩波版日本書紀の注釈によれば、この文章は、漢書・成帝紀の「宣帝愛之、（中略）常置左右」という文章を借用したものです。宣化天皇没時の欽明の年齢「時年若干」という表現は欽明没時にも同様に使われていますので「不明」と同じ意味ですが、欽明即位時に「余は幼年で識も浅く・・・」といつて山田皇女に皇位を譲ろうとしたことから考えて仮に即位時の年齢を二十歳とみても、継体没時には十五歳であり、欽明は継体天皇が七十歳近くになって産んだ子ということになります。日本書紀の欽明の出生に関する記述は真実なのか大いに疑問がわくところですが、なぜか欽明天皇の出生に疑問を持って研究して

いる学者は私の知る限り見当たりません。

古田史学では、「日本書紀は継体天皇の年齢を二倍年歴で記しており、古事記の記す没年『天皇の御年四十三歳、丁未の年』が正しい」と考えています。しかし私は、雄略紀以降は、各天皇の年代が日本書紀に引用された朝鮮半島の史書の年代と整合しており、二倍年歴は使われていないと考えます。そもそも継体天皇が四十三歳で没したとなると、その子であり在位期間が二年と四年にすぎなかった安閑・宣化各天皇は連続して若死にしたこととなります。しかし、日本書紀の記述にはそれを匂わせる記述はありません。古事記の記述は推古天皇で終わっていますが、仁賢天皇から推古天皇まで十代にわたり、その前の顕宗天皇まで必ずと言っていいほど記載されていた各種のエピソードが全く記載されず、王宮のあった場所と系図の紹介のみの記述となっています。唯一の例外が継体期における石井（磐井）の殺害の記述です。仁賢以降の各天皇の没年も記載されていません。唯一の例外が継体の没年です。私はこの継体の没年は古事記の編者である太安万侶が、欽明天皇出生の記述と継体天皇の年齢との整合性に疑問を持ち、つじつまの合う史料を探し出して追記したものと考えています。恐らく朝鮮半島史書の中につじつまの合う倭王（磐井）の没年の記述を見つけて出して追記したではないでしょうか。

欽明天皇即位にまつわる不可思議な点に触れます。欽明天皇は、前天皇（宣化）妃である橘皇女（欽明自身の皇后・石姫皇女の実母）ではなく、前々天皇（安閑）妃である山田皇女に政治を任せたいと要請したと記され、又山田皇女を皇太后に据えています。その理由は書かれておらず、橘皇女の崩御についての記載もありません。仁賢紀によれば、欽明天皇の実母手白香皇女と皇后の実母橘皇女は仁賢天皇の皇后春日大娘の生んだ同母姉妹で、太皇后にまつた山田皇女は彼女らの腹違いの姉妹です。欽明天皇に関連する三名の女性はとも仁賢天皇の娘であり、まさしく正統王朝への復帰を象徴しています。しかし不思議なことに欽明即位時にその中の橘皇女（宣化天皇の皇后）の存在は消されています。

次に、欽明天皇の妃にまつわる不可思議に移ります。欽明天皇の皇后は宣化天皇の娘の石姫です。石姫は二男一女を生んだとされ、その中の一人が敏達天皇です。欽明天皇は皇后の他に五人の妃をいれています。二人は皇后の妹です。しかしその中の一人倉稚媛皇女は古事記によれば宣化天皇の嫡子・倉之若江王と記されています。それが日本書紀では皇女に置換えられ、欽明の妃になっています。倉稚媛皇女は石上皇子を生んだとされていますが、石上皇子の動向はその後まったく記されていません。さらにもう一人の日影皇女は宣化紀には出てきません

が、倉皇子を生んだとされています。日本書紀の編者自身が、日影皇女の名が「どの書にでているのかを知らない。後に調べる人が知るであろう。」という分注を加えています。これはどういうことでしょうか。この二人の妃は、欽明が宣化朝を正統に引き継いだ証拠として創作されたもののように思われます。

残る三人の妃の中二人は蘇我稲目の娘です。堅塩媛は用明、推古以下十三の子をもうけたと記されています。伝説的な景行天皇を除くと、欽明以前の歴代天皇と一人の妃が生んだ子の最大数は、皇后が嫉妬深い為皇后以外に子を作れなかった允恭と忍坂大中媛との間の七人（古事記では九人）です。その次は崇神と御間城入媛の間の六人です、皇后・妃が六人いる中で堅塩媛が十三人の子を産み続けたというのは特異です。また小姉君は崇峻以下五人の子をもうけています。驚くことに欽明天皇は臣下である蘇我稲目を祖父とする子を十八人も作り、その中の三人が天皇になっているのです。又、もう一人の妃である春日日抓臣の娘・糠子（あらこ）は二人の子をもうけています。しかし、古事記では日影皇女とその子（倉皇子）がおらず、糠子に三人目の皇子（宗我倉王）がいたことになっています。宗我倉王という名前からは蘇我氏に養子に出したということが想起されますが、日本書紀はその存在を隠蔽しているかのようです。

日本書紀のこの一連の系譜の紹介には「異説多し」という注釈が加えてありますが、真実を把握できていないか真実を知らながら真実の隠蔽を図っているかのどちらかだと思われまます。そして欽明天皇の子、孫たちは「隠された歴史(9)」で紹介したように、異常な異母兄妹婚を繰り返します。そのスタートは敏達と推古です。あたかも欽明天皇の血と蘇我稲目の血が強く混じり合っているのを証明するかのようです。

次に欽明紀に記されたその他の近畿関係の記事を羅列します。

① 欽明天皇の幼時の夢に出てきた秦大津父を見つけ出し、即位後大蔵省に任命した話(秦大津は二匹の血だらけの狼が戦い合うのをやめさせたという経緯を話した。)

② 元年…重臣は宣化時をそのまま引き継いだ。

③ 元年…百濟人已知部が帰化し、倭国の添上郡の山村に置いた。

④ 元年…蝦夷や隼人がともに衆をひきつれて帰属した。

⑤ 元年…倭の国の磯城島の金刺の宮に遷都した。

⑥ 元年…高麗・百濟・新羅・任那みな獻使し、百識を修めた。

⑦ 元年…秦人・漢人ら諸蕃の帰化したものを国郡に安置し戸籍を編成した話。

⑧ 元年…難波の祝津に行幸した際、新羅征伐について、物部尾輿らが任那四県

割讓に対する新羅の恨みが深いと奏した話。

⑨ 元年…大伴金村は任那四県割讓の追及を恐れ住吉の宅に退いていたが、天皇は「久しく忠誠をつくした。」といつて、深く優遇した話。

⑩ 五年…越の国佐渡に肅慎人が住みついた話。

⑪ 七年…五年の春川原民直宮が良馬を見つけた話。

⑫ 一三年…箭田珠勝(やたのたまかつ)大兄皇子(欽明の長嫡子)が薨じた。

⑬ 一三年…百濟の聖明王が献上した仏像・經典の扱いについて蘇我稲目と物部尾輿、中臣鎌子が対立し、仏像は蘇我稲目の家に安置されたが、のちに疫病が国に流行したため、物部尾輿、中臣鎌子らが仏像を難波の堀江に流し棄て伽藍に火を放ち、この時大殿に火災があったという話。

⑭ 一四年…茅渟の海(和歌灘)の中に仏教の楽音がし、光彩が照り輝いていると聞いて溝辺直が海に入って照り輝く樟を見つけ天皇に献上し、それで仏像二体を造った話。吉野寺(世尊寺)の像の由来。

⑮ 一四年…樟の勾の宮に行幸した際、蘇我稲目が王辰爾を遣わして船の賦を数え記録した。王辰爾は姓を賜わって船史となったという話。

⑯ 一五年…皇子淳中倉大珠敷(ぬなくら

のふとたましき)尊を立て皇太子とした。

⑰ 一六年…蘇我稲目・穂積磐弓臣らに吉備の五郡に白猪屯倉を置かせた話。

⑱ 一七年…蘇我稲目らに備前の児島郡に屯倉を置かせた話。

⑲ 一七年…蘇我稲目らに、倭の高市郡に韓人の大身狹の屯倉と高麗人の小身狹の屯倉を置かせ。紀の国に海部の屯倉を置かせた話。

⑳ 二二年…新羅の使者が難波大郡などで何度も冷遇されたのを怒り、また穴門で偽りの話を聞いて日本の侵略に備えた話。

㉑ 二三年…新羅の使者が帰国せず、百姓に取り上げて、河内国更荒(さらら)郡鷓鴣(うの)の邑の新羅人の先となつた話。

㉒ 二八年…郡国で大飢饉があつた話。

㉓ 三〇年…膽津(しつ・王辰爾の甥)を白猪屯倉に派遣し、田戸の籍を定めた話。

㉔ 三一年…蘇我稲目が薨じた。

㉕ 三一年…泊瀬の柴籬の宮に行幸した際、漂着した高麗の使者を越の郡司が隠していると告げられ、臣下を派遣して高麗の使者を迎え、さらに越の郡司が横取りした調を返させた話。

㉖ 三一年…高麗使が近江に着いたので難波津から近江北山に出て出迎え、山背高槭館、相樂館で饗応した話。

㉗ 三二年…高麗の献物と表が数旬届かなかつた話。

㉘ 三二年…天皇が病気になる、皇太子が駅馬で帰ってきた。天皇は「新羅を伐つて任那を建てろ」と言い残して崩じた。

㉙ 三二年…河内の古市で殯をした。

㉚ 三二年…新羅は未叱子失消(みししししょう)らを派遣して殯に哀した。

㉛ 三二年…檜隈の坂合の陵に葬った。以上、百濟との交流記事を除いた記事の概要を羅列しました。この中で蘇我稲目の動向が中心となっていて、蘇我氏の史書からの引用ともとれるものが、⑬⑮⑰⑱⑲⑳です。朝鮮半島関連記事にも蘇我氏が出てくる記事があります。

かつた話。

⑳ 三二年…天皇が病気になる、皇太子が駅馬で帰ってきた。天皇は「新羅を伐つて任那を建てろ」と言い残して崩じた。

㉙ 三二年…河内の古市で殯をした。

㉚ 三二年…新羅は未叱子失消(みししししょう)らを派遣して殯に哀した。

㉛ 三二年…檜隈の坂合の陵に葬った。以上、百濟との交流記事を除いた記事の概要を羅列しました。この中で蘇我稲目の動向が中心となっていて、蘇我氏の史書からの引用ともとれるものが、⑬⑮⑰⑱⑲⑳です。朝鮮半島関連記事にも蘇我氏が出てくる記事があります。

① 一六年…百濟の聖明王が殺されたことを報告に世子恵が来朝した時に、にわか蘇我臣が「なんの咎があつてこんな禍をまねいたのか。どのようにして国家を鎮めようとするのか」と問うた話。

② 三二年…大伴狭手彦が高麗の宮から奪った財宝のうち、甲、刀、鏡、幡とともに美人の媛とその美女を蘇我稲目大臣に送った話。(＊天皇には七織の帳を献じたとのみ記されている。)

蘇我氏の記事以外というと、⑳⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛

㉜は高麗、新羅との交流記事です。⑩⑪

㉝は地方の出来事を伝えた記事です。③

㉞㉟は帰化人の動向を伝えた記事です。

これらの記事は、筑紫に都があり百濟と

親密な交流を行っていた後期九州王朝の動向とは異なる近畿の動向を記した記事であると思われますが、欽明天皇の姿は見えませんが、欽明天皇は傍系の継体天皇と仁賢天皇の娘との間で生まれた嫡子として天皇家の系図を正統に戻した天皇であり、在位三二年と長期に日本を統治していたといわれる天皇です。しかし、その欽明紀の大半は百済との交流関係を中心とした朝鮮半島記事が占め、少ない近畿の記事の中では、むしろ蘇我稲目の方が存在感をもち、欽明天皇自体は幼名も年齢も不詳であり、即位にまつわる記事の中には不可思議な点が多く存在している。それが日本書紀に記された欽明天皇の姿なのです。

道をゆく (15)

「熊野街道」(三)

成瀬和之

京都から船で現在の大川(旧淀川)を下って来る熊野詣の人々の上陸地点が、京阪天満橋駅近くの「窪津」(窪んだ船着き場)でした。クボツはタカツ(高津、今の上本町辺りの高い台地)に対する言葉です。

淀川は近代に西向きに付け替えられ、新淀川がつくられました。それまでは、毛馬から大川(旧淀川)に南向きに流れ

ており、天神橋と天満橋の間に上陸することになったのです。

その地点は、中世は「渡辺の津」、近世になってからは「八軒家(はちけんや)」と呼ばれるようになりました。京阪天満橋駅の道路を隔てた南側に永田屋という昆布店があり、その前に「八軒家船着場址」の碑と説明板があります。

渡辺の津から生玉、天王寺まで続く松屋町筋が古代の海岸線で、その東側の上町台地を熊野街道は通っていました。

現在の「エル大阪」の東側に「窪津王子」はありました。大阪市中央区石町(こくまち)二丁目に坐摩(いかすり)神社(いかすり)と読むのが正しいが、いまは「ざま」で思っています。(の)址地があり、そこが「窪津王子」の址地と思われま

す。「撰津国府」がここに置かれ、「国府津(こうづ)」と称したところから「国府(こくふ)」が訛って「こくまち」に転じたもの(『撰津名所図会』)と考えられます。

イカスリという言葉は「ここに居ることを知る」という意味を含んでいます。上町台の、つまり古代の大阪の地主神そのものでした。

大阪城を築いた豊臣秀吉によって、坐摩神社は移転を命じられ、大阪市中央区の現在地(東本願寺南御堂の北西)に移りました。

渡辺の津を拠点とする水軍武士団「渡辺党」に由来して、坐摩神社は全国の渡辺・渡部姓の発祥の地とされています。

また、落語家の桂文枝(三枝改め)らが呼びかけて、二〇一一年一〇月に「上方落語寄席発祥の地」の石碑が建てられました。

熊野九十九(くじゅうく)王子とは、参詣道沿いにあつた、熊野権現の御子神を祀る神社の総称で、九十九は実数ではなく、それに近いほど多いという意味で、そう呼ばれました。

「窪津王子」が熊野九十九王子の第一王子で、坂口王子、郡戸(こうづ)王子へと南に進みます。

谷町八丁目交差点(大阪市中央区)の西に「高津宮」があります。ここに第三王子となる「郡戸王子」推定地の石碑が建っています。

ここは古代の地主神、比売古曾(ひめこそ)神社のあつた場所です。古代コリア由来の女神であるシタテルヒメまたはアカルヒメ(いずれも「太陽の妻」)を祀る神社でした。「高津宮」は「仁徳天皇」(天皇の呼称は、ずっと後の天武天皇の頃からです)ので、「」を付けました)の皇

居として、もともとは上町台地の中央部にありましたが、豊臣秀吉の大阪城築城のあたりを受けて、比売古曾神社の地に移ってきたのです。「郡戸王子」推定地の石碑にそのことが書かれています。

高津宮から夕陽ヶ丘を経て四天王寺に至ります。

四天王寺は、五九三年(元号がまだ生まれていない推古天皇元年)厩戸皇子(聖

徳太子)創建の日本最古の官寺です。中門(仁王門)・五重塔・金堂・講堂が南北一直線に並び、中門と講堂を結ぶ回廊が五重塔と金堂を四角形に囲む「四天王寺式」と呼ばれる伽藍配置です。塔中心の飛鳥寺式から仏像の安置された金堂中心へと移ってきた伽藍配置です。

西門の石の鳥居は一二九四年忍性が建立した日本最古の石造大鳥居の一つです。その扁額に「釈迦如来法輪所当極楽土東門中心」と記され、極楽浄土の東にある門と言われてきました。西方浄土への「日想観」の修行とともに、法然上人、後白河法皇らも参詣しました。「日想観」というのは、西に沈む夕日を拝して極楽浄土を観想するという修行です。

熊野への道に向かう南大門には「熊野権現礼拝石」があります。その横の説明板には「四天王寺の西門信仰と同じく、熊野三山が極楽浄土を願う浄土信仰の聖地として篤く信仰されたことから、人々はまず当山に詣でた後、ここで熊野の方向に礼拝し、熊野までの道中の安全を祈ったといわれる」と書かれています。なお、東門に向かつては「伊勢神宮遥拝石」もあります。

南大門から国道二五号線(俊徳道)を隔てて「超願寺」があり、熊野街道は天王寺駅につき当たりります。

「熊野街道」(三)

JR天王寺駅南側の松崎町方面出口から天王前予備校前を熊野街道は南下します。その先のコンビニの横を右折したところに阿部寺跡があります。白鳳時代の瓦が出土し、塔心礎もありましたが、今は、天下茶屋公園に移されて、保存されています。この辺りが阿倍野区一帯を支配した阿部一族の中心地であったと思われま

阪堺電鉄沿いに南下し、東天下茶屋駅を過ぎたところに安倍晴明神社があります。平安中期の陰陽家、安倍晴明誕生の地と伝えられ、安倍晴明を祭神とする神社です。

その少し南に阿部王子神社が現れます。熊野本宮証誠殿を模した本殿があります。本殿の右前の柱に「第二王子社」、左前の柱に「石清水八幡宮御分社」と書かれています。ここで、熊野詣の貴族たちによって、奉幣や読経の供養、神楽や舞の奉納、和歌会などの儀式が行なわれたのでしよう。また、京の都から淀川を下る際には石清水八幡宮に水上の安全を祈願する習わしがあり、そのゆかりもあって八幡宮の分社となっていたのでしょうか？阿部王子神社は、大阪府で現存する唯一の王子社であり、重要な王子社だったと思われま

阿倍野王子神社の隣に印山寺があります。このお寺は阿部王子神社の神宮司だったのです。明治政府が神仏分離令を出すまでは、「神仏習合」が普通で、神社とお寺が一体だったのです。熊野那智大社と青岸渡寺も隣接しています。神も仏も、異質な思想が重なり合い、併存している「文化の重層性」が、江戸時代までの日本の特徴でした。

阪堺線の次の駅が「北畠」です。大阪府立住吉高等学校の最寄りの駅で、そのすぐ西側には阿倍野神社があります。南北朝の対立の中で南朝についた北畠親房の長男、顕家が戦死したのが、この近くであったのに因み、北畠顕家が祭神となつた神社です。

北畠の次の駅が「姫松」です。

われ見ても 久しくなりぬ 住吉の岸の姫松 いく世経ぬらむ

(伊勢物語二一七段)

海岸線沿いに熊野古道が通っていたことがわかります。

姫松から帝塚山学園の辺りまで南下すると万代池です。古墳の跡と言われ、大正期に遊園地ができ、一九四〇年に公園として完成しました。広い池で、「カキツバタビオトープ」という説明板が立っていました。ビオトープとは、ドイツ語で「生き物のすみ場所」という意味です。最近では、いろいろな種類の生き物が自然な形で生きていける自然環境を備えた場所をビオトープと呼んでいるそうです。

近所の人々が、早朝から池の周りを散歩したりランニングしたりしていました。今日の熊野街道歩きの「大トリ」は住吉大社です。

航海と漁労に巧みな海民が、東シナ海を超えて、まず九州にたどり着き、日本列島を海沿いに、東に向かい、「住吉(住之江)の津」にたどり着きました。

住吉大社は、かつては海であった西側に向かって、第三殿を手前に、奥へ第二殿、さらに奥に第一殿と、縦に並び「魚鱗の陣」という配置になっています。さらに第一殿の南側に「神功皇后」を祭神とする第四殿がつくられ、「鶴翼の陣」という武神を祀る配置になっています。「神功皇后」というのは、神のお告げで朝鮮を攻め、新羅を降伏させ、百済や高句麗を服従させたという「三韓征伐」の立役者として、『古事記』や『日本書記』に出てくる伝説上の人物です。前回の坐摩神社の祭神にもなっています。もともと海に面して海上守護を意味する神社だったので、きな臭い性格が付け加わったのです。

一方、風光明媚の地であったことから、和歌の神としての崇拜も受け、後鳥羽上皇の熊野詣のお供をした藤原定家の『御幸記』では、お経をあげ、神楽・相撲などの「法楽」、和歌の披露が行われたことが記されています。

住吉大社には摂社や末社も数多く、中でも、楠栂(なんくん)社(初辰さん、楠

の木が祭神、土製の招福猫を月参りに受けて、四十八個揃えると大きい猫が授けられ、四十八辰(始終発達)で縁起よしとされます。「発達」という言葉が昔から使われていたことになりました。

他に、新宮社は、津守寺付近(今の墨江小学校の場所)にあった津守王子を移転したものと云います。

◇ お詫びと訂正

先号で「道を行く(15)」の後半部分が掲載されませんでした。成瀬さんにお詫びを申し上げるとともに今回「道を行く(15)」の全文を掲載いたしました。

編集後記

SK生

▼今年も八月十五日が来る。多くの犠牲者を出したアジア太平洋戦争は私たちに多くの教訓を残した。だが、政府の新型コロナ対策を見ると「政府はそこから何も学んでいない」ことを痛感する。▼たとえば感染防止と経済回復の両面作戦。二鬼を追う作戦が成功した例は古来まれであり、多くの識者のいうとおりミッドウエー海戦の惨敗がいい例である。▼経済活動を止め徹底したPCR検査をして回復へと向ったニューヨークなど対策の先後を見極めて成果をあげた例もある。▼その一方でブレーキとアクセルを一度に踏む如き発言を続ける政府が最後に言うのは「国民の皆さんはよく注意して」というお決まりの「自己責任」論。「国民よ、自分の頭で考える」というのであれば政府は何をするのか。政府の腹積りを一度とくと聞いてみたい。

山椒魚

降るときはとことん降ると決めた雨

二十一世紀も二十年が過ぎようとしている。今では毎年の夏行事のように、これまで経験したことのないような、五十年百年に一度のような大雨が連日のように降り、大小の河川が氾濫決壊する。

蒸発量を超える雨が降るはずはないのだが、言われて久しい温暖化が降り続く豪雨にどう影響しているかは、素人には定かにはわからない。地球の平均気温付近でも、一度の温度上昇で大気中の飽和水蒸気圧は数%上昇するから、雨の振り方が変われば豪雨にもなるということなのだと思う。地球の平衡指標の何かが数%変動すると、まるで天地が鳴動するほどの劇的な変化が引き起こされるのである。たとえば標準大気圧である1013ヘクトパスカル(hPa)から、大気圧が3%減少すれば983hPaとなり、これは立派な台風である。普段は1%の変動でも雨か晴れの違いが生じる。

そんなことを思っているとき、三十年も前にクレイジーキャッツの面々が、こんな歌を歌っていたことを知った。

地球温暖化進行曲

作詞 伊藤アキラ・作曲 宮川泰

歌 クレイジーキャッツ

地球が暑くなってどこわりい

暖房いらずで いいじゃないか
水道ひねれば 温泉で

牛乳しぼれば 粉ミルク ソレ!

どんどん だんだん 温暖化

どんどん だんだん 温暖化

こんな地球に 誰がした

けっこう 毛だらけ 灰だらけ

けっこう 毛だらけ 灰だらけ

地球が暑くなって どこわりい

二酸化炭素で いいじゃないか

男は腹巻 ステテコで

女はビキニで 盆踊り ソレ!

どんどん だんだん 温暖化

どんどん だんだん 温暖化

こんな地球に 誰がした

けっこう 毛だらけ 灰だらけ

けっこう 毛だらけ 灰だらけ

これが温暖化への警鐘であったかどうか。

その判断は読者にお任せする。いつものことだが、後になれば危機はそのずっと前から予知されていたのだと分かる。そういうえば、新世紀を歌うこんな歌もあった。

来たれ21世紀

作詞・作曲 忌野清志郎

私がつけた足跡には

大きな花が そう、

いつかある晴れた夏の朝にきつと咲く

でしょう

ワンツー、ワンツースリーフォー

シワヨセが歩いて来るぞ

みんな急いでかくれんぼ

廻り廻って何処から来たか

ついにここにもやって来た

人生はどうせそんなもんだ

笑う奴が居りや泣く奴も居る

俺は自由 48年間1日たりとも

働いたことはない

逃げる Yeah Yeah Yeah

シワヨセがここまで来たぞ

誰が最初にヘマをした

巡り巡って俺の所に

今夜ビツシリやって来た

人生はつまりそんなもんだ

ハメられる奴も居りやチクる奴も居る

俺は自由 365日1分1秒たりとも

働いたことはない

逃げる Yeah Yeah Yeah

ワンツー、ワンツー、ワンツー、

ワンツースリーフォー

人生はつまりそんなもんだ 人を殺す

奴も居りや自殺する奴も居る

俺は自由 100年も200年も1日

たりとも働くつもりはない

逃げる Yeah Yeah Yeah

人生はどうせそんなもんだ 戦争した

がる奴が平和を守ってるらしい

俺は自由 21世紀も1日たりとも働

くつもりはない

逃げる Yeah Yeah Yeah

ワンツー、ワンツー、ワンツー、

ワンツー 逃げる

ワンツー、ワンツー

逃げる 逃げる

ワンツー、ワンツー

逃げる

シワヨセはやはり歩いて来ないのか。

俳句

土田 裕

下戸なりし兄を偲びて新酒酌む
雷鳴に手元狂ひしテイショット
辛きこと言ふまでの顔唐辛子
来世まで続く道かも蟬の穴
猛と酷二つ付けたき残暑かな

影山 武司

電光の浮子つと沈む夜釣かな
ひたすらに土塊と化し墓
独り居の泡を目で追ふソーダ水
剥き出しの砂岩の地層雲の峰
白南風の渡りてきたり露天風呂
タンカーの白き影絵や夏霞
藁の香と土の匂ひの夕立来る
夏雲を押しして自転車跨線橋
飼主も犬も水玉避暑地かな
蟬時雨終点のバス捕縛され